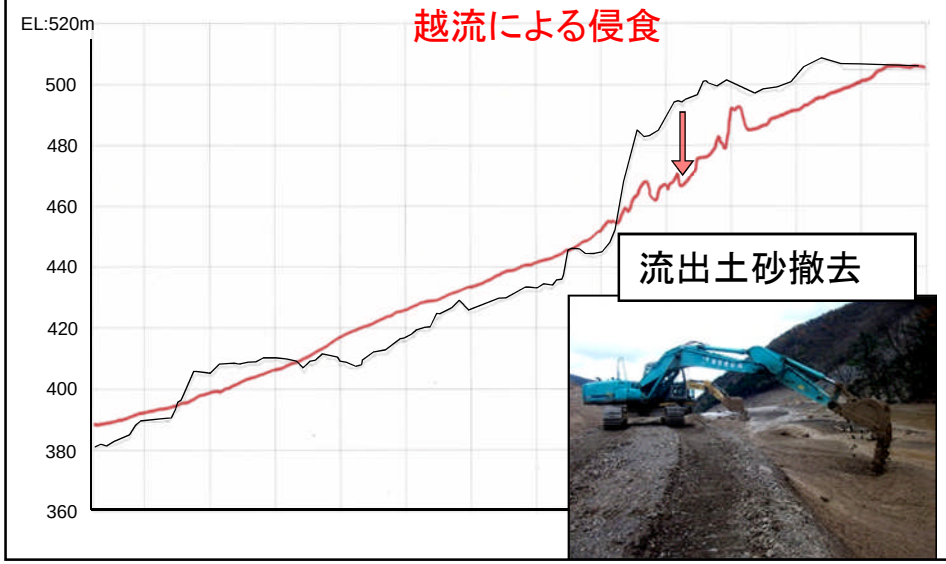
発災後もまとまった降雨により越流を経験

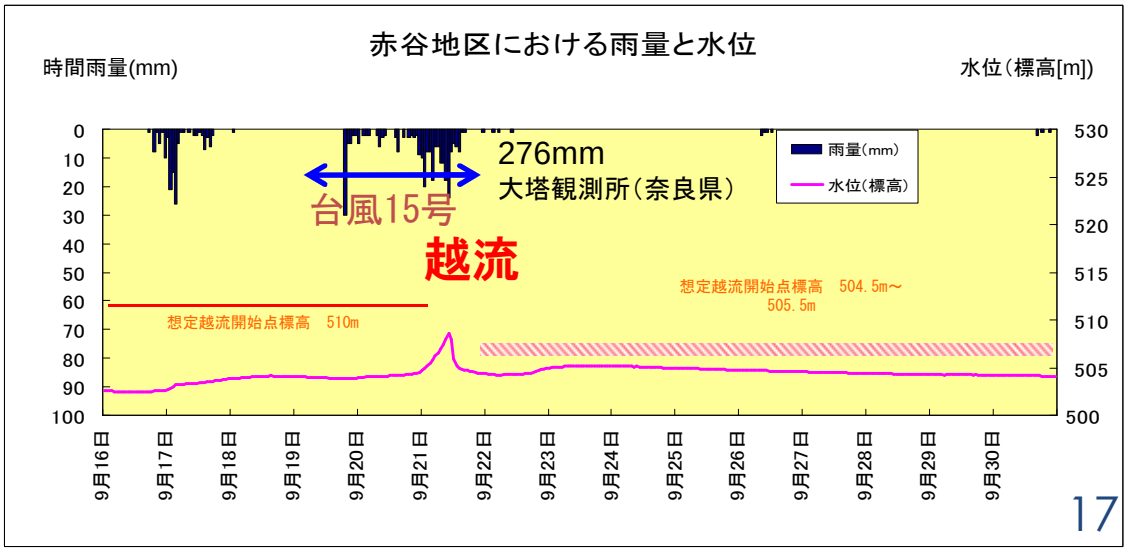
国土交通省

・奈良県赤谷、和歌山県熊野において3回の越流を経験
・赤谷地区では、越流により堆積土砂が大幅に侵食されるとともに下流に設置した工事用道路が流出するなどの被害が発生。住民を不安に陥れるとともに、工事の進捗を妨げた

○ 台風15号前後の堆積土砂侵食状況



○ 降雨と湖水位の状況（9月19日～22日）



直轄砂防災害関連緊急事業の実施

国土交通省

・5箇所全ての河道閉塞箇所において、国による直轄砂防災害関連緊急事業を採択し、緊急的な対策に 着手
・排水ポンプを活用し、河道閉塞箇所の水位を低下させることで土砂災害の危険性を軽減
・また、降雨に伴い河道閉塞箇所に流れ込む流水を安全に流下させるための排水路を設置し、堆積土砂の侵食を防ぐことで重大な土砂災害を未然に防止

熊野地区の例

河道閉塞箇所湛水状況 （10月1日）

ポンプ排水状況

埋め立て完了状況 （12月5日）

北股地区の例

河道閉塞箇所湛水状況 （10月26日）

埋め立て完了状況 （12月20日）

赤谷地区の例

防護土堤設置状況 （12月9日）

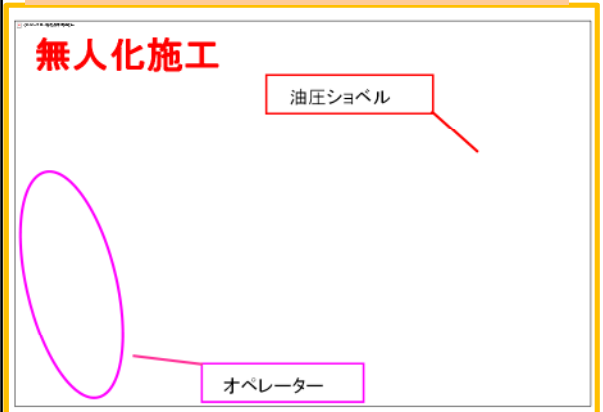
仮排水路設置状況 （12月20日）

河道閉塞対策工事の進捗と警戒区域等の解除

国土交通省

・山間地における対策工は、崩壊斜面からの土砂の崩落等二次災害の危険や陸路によるアクセスが出来ない作業現場であり、安全かつ迅速に施工するため無人化施工や組立て式重機等の最新技術を活用し工事を実施
・熊野地区は埋め立てと仮排水路が完成したことにより「重大な土砂災害が想定される区域」が解消されたため警戒区域等を 解除し、約3ヶ月ぶりに地元住民は帰宅し安息を取り戻した
・全5箇所において年度内の仮排水路の設置完了を目指し鋭意工事を推進

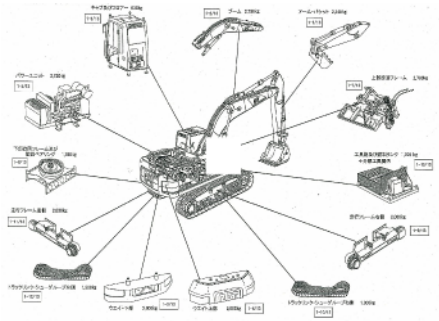
最新技術の活用



組立て式重機の活用

■分解型油圧ショベルでは国内最大級（1.0m³級）

■今回初めて災害現場で活用



13個のパーツに分割

バックホウ運搬

熊野地区埋め立て完了

土石流の現場。左端に壊れた住宅の残骸があり、右奥の土砂ダムには作業用の重機が点在していた

住民ら、安堵の表情

田辺・熊野地区 78日ぶり警戒解除

台風12号で土砂ダムが出来た田辺市熊野地区で3日、78日ぶりに警戒区域が解除された。この日から自宅に寝泊まりする人や、荷物を運ぶ人が地区内の道路を行き来し、住民らには安堵の表情も浮かんだ。朝日新聞記者も土石流発生翌日の9月5日以来、約3カ月ぶりに地区に入った。

午前9時、門扉は市の職員らによって開けられ、その後、撤去された。すでに先月8日から日中5時間の帰宅が認められていたこと

もあってか、午前中に地区内に入る住民は少なかった。地区内は静かで、熊野川には土石流を感知するセンサー用とみられるワイヤが所々に張られていた。

門扉から約2キロ上流に進むと、土砂崩れで発生した土石流の爪痕が生々しく残っていた。元あった橋は50メートルほど押し流され、車や自動販売機の残骸が転がっている。そこから1キロほど上流にある土砂ダムは、一部が人工の盛り土になっていて、国土交通省による安全確保の作業が進んでいることがうかがえた。

住民の一人、中村日出夫さん(79)は家に入るなり部屋の電気をつけて仏壇に手を合わせた。「やっとこれからはずっとここで寝られる。気楽やよ。避難先は窮屈やった」と話した。

大原秀子さん(76)は、この日、引っ越しの荷物を運び入れた。避難先の面川地区の市営住宅から冷蔵庫や洗濯機などを少しずつ移し、1週間後くらいには自宅で生活し始めるつもりだ。

「この3カ月本当に長かった。肺炎にもなった」と台風以来の困難な暮らしを振り返ったが、声や表情は明るかった。（張守男）

大原秀子さん(右)は隣の中村洋子さんと自宅の前に座り込んでミカンを食べながらおしゃべり。笑顔が3カ月ぶりに集落に戻ったII いずれも田辺市熊野

警戒区域解除を伝える新聞記事（H23.12.4　朝日新聞）